## 広瀬有紀 寺山修司記念館

八戸ブックセンターとの馴れ初めは、2015年の秋に遡る。設置予定のギャラリーで行う企画展への協力を仰ぎたいということで、寺山記念館まで挨拶と相談にみえた。私自身がブックセンター構想について知ったのはその日が初めてで、ゼロ年代から続いてきた「小さな官」の逆張りを地でゆく、市直営の本屋さんという大胆さにまず仰天させられた。しかも、県内外から本のプロフェッショナルの精鋭を集めて企画運営に臨むという。いかに腰を据えて「本のまち八戸」に長期で取り組んでいくつもりなのか、このまちの本気が伝わってきた。文化でまちと人を作っていこうという覚悟!シンプルに言うならば、同志を見つけた瞬間に歓喜した。当時、今の職場に来てから1年目、新天地で抱く夢は大きいけれと焦るばかりの私は、伴走できる仲間を見つけた気持ちだった。だから、馴れ初めというに相応しい出会いであったと思う。

具体的な連携は、センターでのギャラリー展「寺山修司 言葉の森」(2017年)にはじまり、ここ 2年は、私が「アカデミック・トーク」シリーズの一人としてお邪魔している。「アカデミック・トーク」は、主に県内の研究者・専門家が専門分野について分かりやすく解説するもので、これまで県内文化施設の学芸員も多く登場している。

この催しが素晴らしい点は、登壇者が会場からの質問に大いに刺激を受けることである。自身の研究が世界と地続きで繋がっている手応えを感じられるのは研究者にとって得難い体験だ。少なくとも私は過去2回トークさせてもらった1月10日(寺山修司の戸籍上の誕生日)は、今後も毎年予定を空けておく所存である。

実は、寺山修司は5歳の頃の数ヶ月間、八戸に住んでいたことがある。警察官の父が出征前に務めた最後の赴任地が八戸だった。当時の八戸警察署の所在地は「番町」で、今の八戸市美術館の目と鼻の先である。同じ町内に幼稚園もあったので、園児だった修司がこの周辺を駆け回っていた可能性は高い。「青森県出身」と冠を付けられることが多い寺山だが、今後、八戸での足跡が鮮明になれば、津軽から南部までを股にかけて育ったとより自信をもって言えるようになる。

この方面の寺山研究が進み、形になるときには、ブックセンターと共同で展示やイベントなどの企画を行ってみたいというのが私の密かな目標である。今から楽しみだ。

書店員はもともと本と人との間に立ち、両者の媒介者になる専門家だ。ここは、さらに本に関わる 主体である人を育てるというミッションも引き受けている。そして確かにそれを追行するプロフェショ ナルなチームがいる。これからの新しい書店像を体現する全国に先行する成功事例である。

ブックセンターが持つ一番の強みは、本を軸足にどんなことでもテーマとして扱える柔軟さだ。これには、門外のことにも寄り添い、包括的に文化を育まんとする信念と胆力が必須である。その姿勢とたゆまぬ努力に何よりも称賛を送りたい。

## 広瀬有紀 yuki hirose

. . .. \_ \_ .

寺山修司記念館

コピー」(2022)など

「寺山修司 言葉の森」(2017)

アカデミックトーク「寺山修司記念館企画展『書を捨てよ町へ出よう』解説 現象を生むキャッチ

1989年東京都出身。早稲田大学文化構想 学部在学時に美術史・美術評論を専攻。 2015年〜寺山修司記今館学芸員 近年毛

2015年~寺山修司記念館学芸員。近年手掛けた展覧会は「映画公開50周年記念書を捨てよ町へ出よう」「寺山修司のラジオドラマ」など。

